

国語表現について

齊藤 真子・長谷川 弘

【抄録】 本校で作成した自主教材のテキストを使った高校3年生（3クラス）の国語表現（全員必修 2単位 1クラスに一人の先生）の授業がどのように取り組まれたかの実践報告である。生徒の意識の変化に対応しながら、その改善点と問題点について考察し、新教育課程における国語表現の位置づけについて考えた。

【キーワード】 国語表現 新教育課程 全員必修 自主教材のテキスト 生徒の意識

I はじめに

本校では高校3年生の国語表現を選択ではなく全員必修で行っている。その理由としては、①文系、理系を問わず国語表現（書くこと、話すこと）は必要である。②スピーチはホームクラスの方が幅広いテーマの選択が可能であり聞き手の興味、関心が得られる。③推薦入試、小論文入試などに対応した、小論文指導を必要に応じて行える。④高校国語の学習活動の集大成として国語表現を位置づける、などがある。しかし、新教育課程では、その全員必修を見直したらどうかということが話題に上っている。国語表現の授業に対する生徒の意識の変化もあり、指導方法や学習内容の問題点について考察したい。

II 話すこと（スピーチ）と書くこと（小論文）の関連性

週2時間の内、1時間が話すこと（スピーチの時間）ということで、3～4人（男女各2人）のスピーチを行うと、クラス全員のスピーチを終えるのが二学期の半ばになる。その後、生徒による採点で点数の高い者（クラス全員の集計で200点以上の者）12名が2回目のスピーチをする。そして、二学期も終わろうとする頃、国語表現のスピーチは終わる。

さて、スピーチの授業は、毎年、スピーチをする生徒も聞く生徒も積極的に取り組み、自由に、幅広いテーマを選択してスピーチするので、充実した授業になる。「あの子はどんなスピーチをするだろうか」という聞き手の興味、関心による所が大きい。例えば、「家族」というテーマでスピーチをしたAさんは、小学生の頃、両親が離婚し、「大人なんて大嫌い」といっていた友達が、八月に結婚することと、離婚寸前の状態で部屋さがしをする自分の母親につきそいながら、両親の間で揺れ動く自分の心と悩みを淡々と話した。そして「家族とは何だろう」と問いかけた。個人的な内容

も含んだスピーチに、教室は一時、シーンとなったが、その後の感想と批評では「お母さんを支えてあげて」という暖かい言葉が続いた。ホームクラスであることがいい意味で作用するのであろう。

さて、1991年度の国語表現で試みたことのひとつが「小論文」と「スピーチ」との関連を図るということである。一学期に授業で小論文を書いた後、これからスピーチをする人で、テーマに迷う人は「小論文のテーマと同じテーマでスピーチをしてもよい」とした。「ただし、書き言葉と話し言葉の違いを意識して、原稿を読んでいるだけではつまらないから聞き手の皆に分かりやすく、興味が持てるようにスピーチをしよう」と言った。「小論文」と「スピーチ」をどのように関連させたか、次にそのテーマをあげ、発表例をあげる。

- 冬季五輪について
- 福祉（ボランティア活動について）
- バイオテクノロジーの未来……………（資料）
- 危険な野菜（現在の食糧事情）
- 米の自由化について
- 自然の中の人間（猫について）
- 最近の子供について（最近の子供と親）
- 食卓の米、野菜
- 教育について
- 高齢化社会を考える
- 生きることと医学
- 夢と原発

（ ）はスピーチの時

さて、小論文のテーマをそのままスピーチのテーマにすることは、始めは抵抗感を持つようだ。

例えば酒井さんは「バイオテクノロジーの未来という題では、皆聞いてくれるかしら。私自身はとても面白いと思うし、大学も農学部へ行くつもりだし。でも生物をやってないと、こういう話は興味がわかないも

のだ。」と心配した。しかし、スピーチ終了後に、皆の感想と批評で、「スピーチの内容は私にとっては、知らないことばかりだったが面白かったし良かった」と何人もの人から「よかった」と言われ、一安心した。

(資料) 「バイオテクノロジーの未来」

H3C 酒井はるか

【小論文】

今、生物界、自然界は急激に変化しています。品種改良を重ねて農薬を使わずに害虫に免疫のある作物を作ったり、遺伝子を操作して、二つの物を一つの物にしてしまう……ポマト（トマトとじゃがいも）、オレタチ（オレンジとカラタチ）……そして、クローン生物。菌から薬、酒を作ってしまう。全てバイオテクノロジーのおかげです。それでは、こんなに素敵なバイオテクノロジーの未来はどうでしょうか。

このまま研究を進めて行けば、ますます素敵な物を私達に贈り続けてくれるのでしょうか。一概にバイオの未来はバラ色であるとは言えません。バイオの研究を進めて行く過程で、私達は様々な問題を抱えています。

その一つには倫理的な問題があります。クローンにんじん、クローン牛が作れる今、クローン人間も作ることは可能ようです。しかし、人体実験は許されていませんし、もし自分と全く同じ人間ができてしまったら、世界は混乱に陥るでしょう。（クローン牛は全く同じ行動をしているようです）

二つ目には、自然界の平衡状態を崩してしまうということです。この問題は私にはよくわかりませんが、今まで生活してきた全生物のバランスが崩れるとなると、少し危機感を感じます。

最後に、研究員は企業に雇われています。だから、もうけ第一主義で、環境破壊や、人体への危害は二番目に考えます。アメリカでは、新種のじゃがいもが、ポテトチップスに使われましたが、それを食べた人は、丸一日、腹痛、頭痛を起こしていたそうです。そのじゃがいもはまだ実験の段階だったのです。

バイオテクノロジーが抱えている問題は多いけれど、私達は、これからバイオに頼って生きていかなくてもはいけないと思います。使い方次第では私達に素敵なものを贈ってくれるでしょう。私はそんなバイオテクノロジーの未来を見守り、ときには歯止めになりたいと思います。

【スピーチ】

皆さんは、バイオテクノロジーという言葉をご存じですか。

和訳すると生物技術といいますが、ここ30年ほどで急激に発展してきている技術分野です。

トマトとじゃがいもの遺伝子を合体させて、1本の木の地上にはトマト、地下にはじゃがいもができるポマトという新種を作りだし、2倍の収穫を得ることになります。

寒さに強いカラタチとオレンジの細胞をくっつけて寒い地域でもオレンジの実が成るオレタチの木というものも作られました。

人の体の中にはガンを防ぐ細胞が少しあります。その細胞を少し取って、大腸菌に植えつけると大腸菌が増やしてくれます。そうやって制ガン剤を作っています。

お酒も今は細菌で作っています。

人がインフルエンザ予防注射をうつように、稲に害虫の細胞を入れて害虫に対して免疫を持たせて害虫に強い稲を作りました。

にんじんの一部を切り取って、培養地においていくと、そこから全く同じにんじんができます。クローンにんじんといいます。

このようにしてカーネーションや百合も作られています。

これらのことがバイオテクノロジーによって出来ました。

私がバイオに興味を持ちはじめたのは、日立のCMがきっかけでした。そのCMには研究員の一人の女の人が出てきて“将来は一粒食べると元気が出ちゃう「いちご」というのをつくりたいなあと思っています”と言っていました。それを見て私は、“私もそういうのやってみたいなあ”と思ったのです。それから私はすこしずつバイオのすごさを知っていったのです。

また、さっき例をあげたように、あんなことが出来るのなら、ひょっとして水がなくても、どんなところでも育つ食物はできないかなあと思いはじめました。今、私達が直面している発展途上国の飢えの問題をひょっとしたらバイオの力で解決できるんじゃないかなと。

だけど、ある科学者がそれはムリだと言っていました。研究員は企業に雇われてるから、もしそんな品種ができて企業はただでそれをあげません。すごく高い値段で売るんだそうです。だから発展途上国はそれを買うことができません。

私はそれはひどいなあと思いました。何のためのバイオの力なんだろうと思います。困っている国があればその国のために、ただで作ってあげればいいのにと思います。

それに企業は売れば環境のことはかまわず、どんなものでも作ってしまいます。

バイオテクノロジーが、現実には、かかえる問題は多いけれど、使い方次第では、私達にとってとても良

いものになると思います。

私は将来、そんなバイオに携わって、実際に、元気のでる「いちご」とか、水がなくても育つ食物を作りたいと思っています。

また、「教育について」というテーマで小論文を書いた前田さんは小論文のテーマ自体が大きく、いろいろな事例を紹介したので、原稿が長くなったことを気にして、「スピーチ」の時間があまり長くなってはいけなと考へ「全部話したら、けっこう長くなるし皆聞いてくれるかしら」と心配した。その場合には、「かえって短くするとわかりにくくなるから、時間を気にせずスピーチをするとよい」とアドバイスした。

スピーチ後の感想と批評で、「途中話がどんどん大きくなるので、どんな終わりかたをするのか心配になったが、最後きれいに終わりましたね」と皆から言われた。

いろいろな視点で多方面から教育を見直し、自分の考へる「教育について」正面から論じた前田さんのスピーチは、その内容の重さと長さにもかかわらず、200点以上の高得点を得た。

さて、「小論文」と「スピーチ」を関連させると、スピーチにとっては、本校では高2から、社会科や理科で選択に分かれて履修している教科内容や学習した知識を活用できることになり、内容的に専門的なものとなる。そして幅広いテーマ選択を可能とし、スピーチの内容が豊かなものになる。また、スピーチをする時に小論文を書く時には意識しなかったいろいろな話すための表現の工夫を試みることになる。「小論文」と「スピーチ」に同じテーマを取り上げることで、そのテーマを深め自分自身がよりよく考へることになる。

Ⅲ 自主教材テキスト「国語表現」の改訂

「書くこと」と「話すこと」を2本の柱として編集され、本校の国語表現の授業内容と生徒の実態にそくして作られているので、従来より授業がやり易い「国語表現」のテキストであるが、実際にテキストを使用してみるといくつかの改善点と問題点を上げることができる。

(1) 小論文教材の充実を図る

現行の自主教材テキスト「国語表現」の「書くこと」の構成とそれぞれの説明のページ数は次のようである。

	題	ページ数	資料集	計
第1章	書くこと	10	21	31

第2章	日記	2	4	6
第3章	要約と感想	6	2	8
第4章	手紙	8	6	14
第5章	小論文	6	5	11

小論文教材をもっと充実させることが必要である。

(2) 「国語表現」の「書くこと」の構成を学校行事と関連させる

現在でも「第3章 要約と感想」は5月3日の憲法記念日の前に行われる学校行事「憲法講演会」と関連させている。当日はメモをとり、事後に講演の要約と感想を650字でまとめる。また、事前にテキストにある憲法関連の資料を読んで要約の練習をしたり、憲法記念日の前後に新聞に載る憲法に関する記事を参考として配布したりして事前学習をする。この一連の授業の中で自分の意見をまとめる。それが「小論文」へとつながる。そして個々のテーマを選択し「第3章 小論文」で書く。一学期の「書くこと」の指導をおえる。

毎年「憲法講演会」で高3生はしっかり聞いている。学校行事と関連させていることで「国語表現」の「第3章 要約と感想」の指導に毎年変化がある。

(3) 「日記」と「手紙」の関わりとその発展について

「第2章 日記」は「書くこと」の導入教材として「始業式の日記」を書く。内容は卒業学年である高3生として、自己を見つめ（自照性）、進路選択への決意や不安、新学期の抱負を書くことが中心となる。始業式の日の出来事と行動と感想を、文字で表現することから始まる。

そして「第4章 手紙」は「いままでお世話になった先生への手紙」を書く。敬語を適切に使うことと手紙の形式に則って書くことを主眼とするが、その中には、日記における「自照性」とつながる内容も多く含まれてくる。二学期になり一学期よりも進路選択に悩んだりして、先生に相談したいと思うことが増えてくるからであろう。精神的な意味で、成長の跡がうかがえる内容のものも多い。評価を終えた後で投函する予定で書くものが多い。一人ひとりが書いた「いままでお世話になった先生への手紙」をクラスで紹介すると、個人的な内容の内に、高3生に共通した思いが表現されていることに気づく。「スピーチ」と同じようにホームクラスであることが、よい聞き手を得て授業が生き生きとしたものになる。

「日記」と「手紙」に共通するのは「自己を見つめる」視線であろう。「国語表現」における「日記」と「手紙」のまとめとして三学期に「～として生きる」(800字)や、メッセージ「附属高校の後輩へ贈る言葉」(400字)

などを書くことへつなげることは意味があろう。

(4) 資料集の拡充

附属高校生の文章を積極的に採用

Ⅳ 生徒の意識の変化と全員必修の問題点

全員必修の「国語表現」の授業に対する生徒の意識は、推薦入試や小論文入試が増加する中で、「書く力」を必要とし、実践的につけたいとする生徒がいる一方で、全くそれらを必要としない生徒がいるという、二極化が進行しているといえよう。推薦入試や小論文入試の者については、全員必修の「国語表現」の授業の中だけでは対応できないので、きめ細かな個別指導を、クラス担任と連絡しながら行っている。しかし、その数は年々増え、2学期の集中する時期には、個別指導に追われ時間が不足するという現実がある。

だから、「文系、理系を問わず国語表現（書くこと、話すこと）は必要である」とする立場にたち、全員必修を前提とした現行の「国語表現」のテキストと、それを使った学習指導への見直しの時期がきているといえよう。

Ⅴ 終わりに

1991年度のH3Cの「国語表現」の授業は充実したものであった。それはスピーチが個性豊かなものであったからである。

今年は、スピーチ原稿のチェックを義務化しなかった。どうしても心配な者のみ相談にのった。その理由は原稿をチェックすると、どうしても新鮮な気持ちで生徒のスピーチが聞けないからである。しかし、一方では心配もあった。事前に原稿をチェックしないと、とんでもない内容や、ぼそぼそした小さな声の者がいて、スピーチのレベルをある程度以上にできないから

である。

そういう心配はあったが、今年は「スピーチ後にスピーチ原稿を提出すること」だけを義務化して実施した。「準備不足で次回にしてください」という生徒が一部いたが、一人ひとりの生徒の取り組みは、全体として積極的であった。

「あの子はどんなスピーチをするだろうか」という聞き手の側の興味、関心によるところが大きい。だから「前にスピーチをした人と同じような内容のスピーチにしたいくない」とか「スピーチの構成や引用する言葉を工夫した」とか「話すことが苦手で、あがるので、朝早く来て、教室で話す練習をした」という姿勢や努力を自然にうむのであろう。HR（ホームルーム）を基礎とした「国語表現」のよさである。

さて、国際化にともない日本の文化（古典）に対する理解をとということで古典重視がいわれ「古典講読」「現代語」が入った新教育課程の国語であるが、「国語表現」の重要性が減るわけではない。

従来の高校の古典教育は、文法中心（暗記）の受験教育的側面が強く見られ、古典嫌いを多くうみだした。そういう面へ傾かないような配慮をしながら、国際社会に生活する一人として、自国文化（古典）に興味、関心を持ち、いろいろな国の人々に誇りを持って、説明ができるという古典教育を行うことが必要とされるであろう。だから、国語教育における「表現」＝自己表現の必要性は一層増すことになる。

高3における「国語表現」は小、中、高と学んできた国語の完成教育としての側面を持つものである。一人ひとりの生徒に、自己表現をする場を提供し「国語学習の総まとめ」をする時間として、「国語表現」は大きな意味を持つのである。

（文責 齊藤）